

## 審査結果の要旨

(1) 研究の目的に意義や独創性があるか。

本論文はミドル・ティーンからハイ・ティーンの年齢段階（15～18歳）を対象として、教科外領域の教育活動（道徳・総合的な学習の時間・特別活動）における協同体験を意図したグループワークのプログラム開発とその検証を目的としている。この年齢段階の教科外教育に焦点を当てた研究自体が希少であり本研究は独自性が高いと言える。また、研究の動機や問題の所在も明確であり、現代社会において喫緊性の高い研究テーマである。

現代の若者に散見される人間関係での躓きに対して、主として後期中等教育において4種類の人間関係づくりを構想し、開発したグループワークを通して協同関係を再構築するという研究の方向性は妥当なものと言える。生徒指導のカリキュラム化や授業化の可能性が模索されるなかで本論文は、高校生相当段階を対象とする本格的な開発・実践研究として先駆的・独創的であると判断された。

(2) 研究の方法は当該学問分野において妥当なものか。

教育方法論分野、とりわけ学校教育臨床領域では、グループ内での生徒－生徒関係やグループ活動の進行に伴う生徒－教師関係に着目した研究が目につく。本研究は現代の若者の社会適応力の促進に向けて、グループワークを通じた協同関係づくりの再構築を試みている。また、グループワークを進行する学校の教師の協同性についても、その体験的理解から実践的指導力の養成への道筋を開いたものである。

研究の方法として第Ⅰ部では、先行文献研究から若者の社会適応と教師側の指導の課題を掘り起こし、教科外教育での指導原理をアドラー派の共同体感覚理論と活動理論の最新研究成果から検討・析出している。第Ⅱ部では教科外教育の教育課程と教授-学習過程を検討し、課題解決的なグループワーク（Collaborative Group Work, 以下CGWとする）を構想し、その上でCGWカリキュラムの内容構成とCGWプログラムの具体例が提案された。第Ⅲ部では実際に中学3年生、高校3年生、大学1年生に対してCGWプログラムを実施し、結果の分析・考察を行っている。さらに教職課程の学生と現職教員に対してCGWプログラムの実施・検証を行っている。この一連の方法論は理念的研究・開発的研究・実証的研究という連続性から妥当なものとして判断された。

(3) 研究資料やデータの収集と分析が適切になされているか。

本論文の本文中に引用された、又は参考とされた先行文献数は263点、筆者によって作成された図表は本文中で121点、巻末資料として掲載された図表及び資料は56点である。いずれも本研究での議論・検討に不可欠な研究資料を過不足なく収集し適切にレビューしている。また実験授業で収集・整理されたデータの分析及び考察についても、統計学を拠り所とした分析方法を踏まえて適切に処理されている。

特に終章「総括的考察と今後の課題」で本論文の成果としてまとめられた図表7点は、先進性に富んだものであり、今後、当該学問分野、とりわけ学校教育臨床領域における先駆的実践モデルとしての活用が期待される。

(4) 研究の考察と結論が妥当であり、学術的な水準に達しているか

理念的研究（研究1及び研究2）での考察では、思春期青年の社会不適応の様相を概数で捉えて構造化し、その対応策をチームガイダンスとして方向付けている。また、教科外教育の指導原理をアドラー派の共同体感覚理論と活動理論の最新研究成果に依拠したことは、的を射た指摘・提案であり、本研究のオリジナリティの一つであると判断できる。

開発的研究（研究3及び研究4）での考察では、まず、方法理論をグループワーク論から導出して協同性プログラムの骨格を明確化している。グループワークの歴史と変遷、目的と原理、方法と効果を踏まえてCGWプログラムとして具体的に提案しており、この検討過程と構想案も妥当なものである。

実証的研究（研究5及び研究6）では5つの実験授業（講習）に関する考察が行われている。まず中学3年生、高校3年生、大学1年生に対してCGWプログラムが実施され、協同性が促進される過程の検証が行われた。次に教職課程の学生と現職教員に対してCGWプログラムが複数回、中・長期間実施され、協同性への体験的理解と実践的指導力への波及効果が検証されている。実験授業の手続きとして目的と実験方法、プログラム内容と結果の分析方法、評価方法についても精査されており、信頼性・妥当性及び再現性は十分な程度保証されていると言える。

以上より、一連の理念的研究・開発的研究・実証的研究の連続性を通じた協同性プログラムの開発は、学術的な水準に達した研究成果であると判断した。

#### （5）取得学位にふさわしい意義や成果が認められるか

現代の若者における社会不適応の様相は深刻なものがあり、その未然防止は焦眉の急を要する教育課題である。本論文はそのような状況にある思春期青年に焦点をあて、教科外教育（道徳・総合的な学習の時間・特別活動）でその対応策を講じようとしたものである。協同性プログラムはグループでの話し合いや協同作業などから4種類の人間関係づくりを体験的に構築し、参加メンバーの協同性の促進と深化を図るものである。また、支援するワーカー教師の協同性も高める副次的効果のあることも明らかにされている。本研究で試行された実験授業の結果からは、本論文の研究の目的が一定の学術的水準で達成されたと判断できる。開発した協同性プログラムを用いた授業方法論は、今後の学校教育への汎用性も十分に期待できるものと想定される。

以上より、審査会では全員一致で、本研究が博士（教育学）の論文に相応しいと判断した。